



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	第65期 臨地研究要旨 : 2015年10月 静岡県静岡市 (学会記事) (fulltext)
Author(s)	
Citation	学芸地理(72): 88-93
Issue Date	2016-12-26
URL	http://hdl.handle.net/2309/147296
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

第65期 臨地研究要旨

2015年10月 静岡県静岡市

有度丘陵南斜面に発達する地形的特徴と斜面勾配の変化速度

A類社会・梶原 直景

有度丘陵南斜面は約6000年前に形成された海食崖地形であり、その軟弱な地質から現在も侵食が進行していると考えられる。そこで、本研究の目的を以下の2点とした。1点目に、有度丘陵南斜面に、どのような地形プロセスが作用し、どのような地形が形成されるのかを明らかにすることである。地形図の判読と現地調査によって特徴的な地形の抽出・確認を行い、南斜面にどのような地形プロセスが作用しているのかを考察した。2点目は、斜面勾配はどのような地形変化速度をもつのかを明らかにすることである。南斜面における斜面縦断形、斜面勾配の場所的差異および構成岩石の物性に関する調査を行い、斜面勾配の変化速度を規定する要因について考察を行った。以上、得られた結果は次の通りである。

1. 有度丘陵南斜面には、侵食谷、滑落崖、扇状地、旧海食崖斜面、崖錐などの特徴的な地形がみられた。このことから、南斜面は、降雨・流水による侵食作用やがけ崩れなどの斜面崩壊によって地形が変化してきたといえる。

2. 南斜面に発達する侵食谷に着目し、崖の比高と斜面勾配に関する考察を行ったところ、崖の比高が小さい東端あるいは西端部では、斜面勾配が急であり、崖の比高が大きい中央部では斜面勾配が緩やかであった。また、崖の比高が大きい場所ほど、斜面勾配が緩やかな傾向がみられた。さらに、斜面勾配の変化速度の指標として減傾斜速度を定義し、先行研究のデータと併せて考察した結果、減傾斜速度、すなわち

斜面勾配の変化速度が、崖の比高と岩石強度に規定されていることがわかった。

静岡県における滝の形成位置と縦断形のタイプ分けに関する研究

A類社会・岸野 浩大

滝は、山地河川にみられる顕著な遷急点と遷緩点が近接した水流を伴う急勾配をなす地形である。本研究では、静岡県における滝を対象として、滝の形成位置のタイプ分け、および滝の縦断形の特徴や傾斜角の違いから滝の縦断形のタイプ分けを行うことを目的として、地形図を用いた図上計測と野外調査を実施した。本研究で得られた主な結果は以下の通りである。

1. 滝の形成位置は、河川の本流に形成される「本流型」、河川の支流に形成される「支流型」、河川の上流部に位置している「源流型」の3つにタイプ分けすることができる。このように滝の形成位置の違いをもたらす要因として、成因の違いが関わっていると考えられ、「支流型」は本流と支流との河川の侵食力の違いが、「本流型」・「源流型」は構成する岩石の違いなどに関係している可能性がある。

2. 滝の縦断形は滝面の形状が「直線状」タイプと、「階段状」タイプという2つのタイプに分類できることがわかった。さらに、「直線状」のタイプは、「傾斜角が大きい」タイプと「傾斜が緩やかな」タイプに細区分されることがわかった。

有度山南麓地域における特産物としてのいちご栽培の地域的特性

A類社会・酒井 峻

今日の日本では、地方経済の活性化や農業問題への対策から、地域資源の活用が注目されている。近年の研究でも、ブランド化や第6次産業への関心が高まり、特産物を地域資源として活用することが着目されているが、新しい産地に着目されることが多く、古くからの既存の特産物産地にはあまり着目されない傾向がある。また、今後の農業維持のための課題を明確にすることも必要である。そこで本研究では、静岡市南部の有度山南麓地域を対象とし、特産物であるいちごに着目し、地域を特徴づける諸要素の連関を把握し、特産物産地としての地域的特性および課題を検討した。

有度山南麓地域のいちご栽培には歴史性があり、石垣栽培が生産の確立に寄与した。この地域では、徐々に改良を加えることで現在まで石垣栽培を維持しており、県の奨励品種の開発をする農家の存在もあり、静岡県いちご産地の革新的地域であった。また、東京への出荷を観光農園事業中心に移行したことが、この地域における独自性の維持に寄与した。

この地域のいちご栽培は集落背後の傾斜地と前面の平坦地で、石垣栽培、高設栽培、露地栽培によって行われており、石垣栽培では、気候条件と相まって暖房器具不要の栽培ができています。育苗方法や石垣の組替は、栽培の簡易化の促進や高齢化の影響で変遷してきた。また、各農家は工夫した取組を行っており、いちご栽培の活発化および継続への思いを持っている。

特産物産地としての持続は、栽培の中核である石垣栽培の維持にかかっている。しかし、現在は高齢化と後継者不在による離農により、石垣の耕作放棄地が増え、地域を象徴する石垣景観が損なわれつつある。出荷の際には石垣栽培

のアピールが出来ていなく、差別化ができていない。これらの課題に対して市や地域、JAによる連携を高めて取組むことが必要である。

本研究では既存の特産物産地に着目したが、新しい開発だけに目を向けるのではなく、既存の産地の農業の維持や課題に対して地域全体で共有し、地域資源としての価値を共有できるように対応していくことが求められていると考える。

静岡市清水区における茶のブランド化—ブランド茶「まちこ」を事例にして—

A類社会・鈴木 悠

近年、日本国内の農業の厳しい経営環境を打破する対応策として注目されているのが、農産物のブランド化である。本研究では、静岡市清水区におけるブランド茶「まちこ」を取り上げ、「まちこ」が清水区の茶業地域の存続と発展にどのような影響を及ぼしているのかを考察した。

「まちこ」のブランド形成過程は、3つの時期に区分することができた。何をどのような形でブランド化するのかを検討した検討期、名称管理・品質管理・生産体制の確立を行いブランド化の基礎を築いた導入期、マーケティングを積極的に行うと同時に「まちこ」の生産調整を行った発展期の3つの時期である。それぞれの時期に行うべきブランド化戦略を計画的に行っている。

また、清水区の茶農家は、3つの類型に区分することができた。茶業に対して特に熱心に取り組む「特に積極的な『まちこ』生産農家」、先発の茶農家に続いて「まちこ」を自園に導入した「『まちこ』生産農家」、自園に「まちこ」を導入しない「『まちこ』非生産農家」の3類型である。各世帯における後継者の有無や生産形態、自園の面積の大きさ、改植における手間

と費用とリスクなどが、ブランド化に対する各茶農家間の意識の温度差を生じさせている。

「まちこ」による清水区における茶のブランド化の発展要因としては、徹底したブランド化戦略、茶業に特に熱心に取り組む茶農家の存在、茶農家・茶商・茶専門店の異業種の人々の連携の3つがあげられる。また、本研究のブランド化には、「まちこ」生産茶農家のみならず、「まちこ」を生産していない茶農家も含めた清水区全体の茶農家が、ブランド化の恩恵を受けている構造が把握された。それは、消費者に「清水区はお茶を生産する地域である」ということを伝える役割を「まちこ」が担っていることから判断できる。この特質は、これまでの農産物のブランド化ではみられなかった性質であり、今後注目されうるブランド化の性質であるといえる。

静岡市における有機農業の展開

A類社会・三次 俊宏

有機農業は、消費者の食糧に対する需要の高度化や有機農業の推進に関する法律の制定によって、全国各地で推進・展開できる環境が整った。そこで、本研究では静岡市を対象地域とし、有機農業の展開にどのような地域的特徴みられるのかを検討した。

まず、静岡県全域を対象に、有機農業を含む環境保全型農業によって栽培される作物の分布を市町村別に概観した。静岡県の場合、作物としては野菜と茶が特に多い。野菜は分布の集中地区がみられ、茶は伊豆半島を除く県の山間地域に広く分布していた。作物の集中がみられる地区は、市町村レベルでの有機農業の推進事業がなされており、有機農業の推進団体が存在するなどの傾向がみられた。静岡市は推進事業が活発ではないものの、有機農業に取り組む経営体が点在している。

次に、静岡市を拠点とする有機農業グループから、有機茶の研究会、有機農産物を扱う小売店の勉強会の2つを取り上げた。いずれのグループの所属農家の居住地は、静岡市内だけではなく隣接市にも及んでいた。静岡市中心部は茶の集散地市場であり、全国的に広域流通する。茶を生産する経営体は、有機JAS認証を取得し、有機茶であることを幅広くアピールし、広域的な顧客の獲得につなげていた。また、静岡市中心部は農産物の消費地であり、生鮮農産物を生産する経営体には市内を販売先とする場合も多い。地域内で直接販売する経営体は、有機JAS認証は取得せずにコストを抑え、信頼関係を構築することで販路を確保していた。また、有機農業を始めた動機は健康や環境に対する配慮が主で、グループでの勉強会や研究会は、栽培や販路確保の難しさを克服することに寄与していた。

以上のことから、静岡市の有機農業は、有機農業が推進されている地域のように、有機農業経営体が面的に広がり生産の場として機能するのではなく、市中心部が流通・販売の拠点として機能し、市内外に点在する有機農業を志向する農家がまとまる形態をとって展開していることが特徴である。

静岡市静岡駅南地区における土地利用変化と農地の維持状況

A類社会・吉原 稜平

日本の市街化区域における土地利用状況は、高度成長期を起点に農地から宅地への転用が急速化した。当時に比べ現在の都市化は鈍化こそしたものの、制度的圧力や農業環境の悪化を要因に、農業を保全しにくい状況がみられる。そこで本研究では、静岡市を対象とし、地方都市の市街化区域における農地の維持状況を、土地利用変化に着目して考察することを目的とした。

静岡駅南地区における都市化は都市計画法の制定などを主な要因として、1970年代以降、急速に進展した。市街化区域内の通常農地は宅地化農地と呼ばれ、宅地並み評価をうけ、宅地同等の課税がされる。また、区域内でも生産緑地の指定をうけた農地は農地評価とされ、宅地より安い農地課税にすることができる。市街化区域内農地は生産緑地指定条件を満たしていても、宅地需要に対応しやすいため宅地化農地として残存する場合がある。

駅南地区の中でも、安倍川からの豊富な水資源と低湿地という地理的条件を活かし、水稻栽培を中心農業とする石田3丁目付近の土地利用変化に着目した。この地域の現在の宅地化農地と生産緑地の状況として、地理的条件が整っている水田は生産緑地として保全されやすく、逆に畑地は宅地化農地として都市的土地利用への転用をしやすい状態にある。この地域内には生産緑地指定条件を満たす宅地化農地がいくつも存在する。そうであるにもかかわらず、全体として宅地化農地が多いという事は、農地が保全されうる可能性が低いことを示している。

駅南地区の農地が維持されにくい要因として、次の3点が把握された。それは、高度成長期に都市的土地利用への転換が進行したという都市化進展時期の早さ、市街化区域内の税率の高さと都市的土地利用価値の高さ、茶やみかんに比べ農業政策の奨励がされにくい米が主な農産物であることである。

以上から静岡市駅南地区は、歴史的、地理的、政治的要因が相互に関連し合い、農地が維持されにくい現状がみられる。

観光地・三保松原の特徴と世界遺産登録に伴う影響

A 類社会・糟谷 武志

第二次世界大戦後、日本における観光は著し

く発展した。高度経済成長以降はメディアによって新たな観光地が生み出され、観光の目的・形態の多様化も進んだ。世界遺産登録は、地域経済の活性化と遺産や周辺地域の適切な保全のきっかけになる一方、観光地化による環境の悪化をもたらすといわれる。

そこで本研究では、2013年に世界遺産に登録された富士山の構成資産の一つである三保松原において、人びとの観光目的・観光形態の変化、ならびに観光地としての三保松原の特徴と変化を明らかにするとともに、世界遺産登録が三保松原の観光や環境にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした。

三保松原を訪れる観光客の目的は、三保松原からの富士山の眺望を楽しむことであり、この目的は不変である。すなわち三保松原の観光資源の特徴は、100年以上前から羽衣伝説で有名な羽衣の松を含む松原とその前面に広がる浜からの富士山の景観であり、その特徴に長い間変化はみられなかった。一方で新たに「世界遺産」という特徴が加わった。現在の観光形態は、三保松原周辺では宿泊を伴わないものが卓越し、また三保松原での滞在時間は数時間以内である。

世界遺産登録は観光客の急増をもたらしたが、三保松原周辺での新たな施設の開設や宿泊者数の増加は軽微であり、地域経済の活性化には繋がっていない。一方で静岡市は駐車場不足等の問題に対してすぐに対応し、また環境保全にも力を入れている。地域社会ではNPOや自治体、学校などによる環境保全の取り組みが世界遺産登録以降活発化している。こうした動向には、静岡市が観光産業の発展や地域経済の活性化よりも、三保松原の次世代への継承を重視していることが関わっている。これらの活動は、ユネスコが示す世界遺産の本来の目的である「遺産の保護」と「次世代への継承」と合致しており、三保松原は世界遺産の構成資産になっ

た価値が存分にあるといえよう。

秋葉山本坊峰本院にみる信仰圏と信仰形態の現代的特徴

B類社会・野口 恵里

日本では古来より、神道や仏教、儒教など様々な宗教が受容されてきた。しかし、近代以降の工業化や都市化に伴い、宗教に関わる生活文化や伝統が崩れ始める「世俗化」が進み、宗教と生活・地域社会とのかかわりが次第に薄れていった。伝統的な宗教と生活との関係が希薄化する一方で、宗教に関わる新たな社会・地域変化も生じつつある現在、宗教をめぐる現代的様相を解明する研究が求められる。そこで本研究では、静岡市清水区に位置する秋葉山本坊峰本院（以下、峰本院とする）を対象に、現在の信仰圏および信仰形態の特徴について分析・考察することを目的とした。

現在の峰本院における秋葉信仰の信仰圏は、静岡県中部から東部、山梨県南部に広がる。峰本院における秋葉講には代参講と送り講の2種類があるが、峰本院から距離の近い地域や、裾野市や沼津市など現在でも秋葉講が盛んである地域には代参講が相対的に多く、峰本院から距離のある地域には送り講が相対的に多い傾向がみられた。

2008年から2014年における秋葉講の変化を見ると、代参講・送り講ともに減少傾向にあり、特に送り講の大幅な減少がみられた。また、代参講から送り講への変更や、不定期に送付が断たれるという傾向もみられた。これらより、秋葉講の活動は縮小しつつあると考えられる。同時に、信仰形態にも変化がみられた。講員の宗教意識が薄れ、形式的に護符を受け取る講員が増えている。しかし、現在でも静岡県から山梨県にかけて秋葉講が存続していることや、峰本院の最も大きな行事である秋葉山大祭に多くの

見物客・参拝客が訪れていることから、篤信の講員は減少しているが、広義の講員や講組織は現在も多く存続していると考えられる。

静岡市における都市内部構造とその変化

B類社会・内藤 健裕

本研究では、静岡市を研究対象地域に設定し、現代における地方都市の都市内部構造を明らかにした。また、菅野（1983）が作成した、1970年の静岡市の都市内部構造モデル図と比較することで、40年間に起こった静岡市の変化を明らかにした。

まず、CBDの外側に住宅地と商業地の混在地区が存在する。これは東海道や浅間通りなどの江戸時代からの街道に沿っており、城下町の都市構造が維持されている。主要な交通路に沿って都市的土地利用が分布するのは、安倍川以東の東海道や県道84号線沿いも同様で、幹線道路へのアクセス性において工業立地と利点が重なる。物流をはじめ様々な面において自動車への依存が高い今日では、ロードサイドにおいて商業施設と工場とが混在している。

また、安倍川の東西で土地利用が明確に異なる。東側は静岡都心であるため、様々な都市機能が集積しながらも、業務機能をはじめとして機能分化がみられるが、西側は一部工業地区が存在するものの、基本的には住宅地区である。

菅野（1983）との比較により把握された変化は次の2点である。

1点目は県道407号線（南幹線）の土地利用が変化したことである。1970年時点で沿線は工業地区であったが、今回の結果では商業地区と住宅地区の混在地区となっている。1970年代以降、日本の工業は成熟段階を迎えるにあたって脱工業化が進んだとされており、その時代背景が地方都市の内部構造にも影響したと考えられる。一方、ロードサイドで、かつ静岡都心への

アクセス性が良いため、商業施設や住宅が代わって立地していったと考えられる。

2点目は、東静岡副都心の変化である。1970年時点ではDID東端部であったこの地域は、1999年に東静岡駅が開業して以来、静岡の副都心として開発が進んだ。2015年現在でもさまざまな開発が進行中であり、行政の計画が都市の内部構造に反映されている。

静岡県における自動車部品工場の立地展開

B類社会・木村 龍哉

自動車産業は、その関連産業の広さから、全国に産業集積地域を形成してきた。その多くは、完成車工場の近くで完成車メーカー系列を中心とする工場の集積がみられる。静岡県においても、スズキ（株）の本社などを抱える県西部ではそうした傾向があるが、完成車メーカー本社機能のない県中部や県東部では異なる特徴がみられる。本研究では、そうした静岡県内の地域的特徴を明らかにするため、「静岡県会社要覧」を用いて自動車部品を取り扱う会社を抽出し、各会社の立地、資本金や従業員数、製造品分類等のデータを分析した。それら分析から明らかになった各地域の実態は以下の通りであ

る。

中部では、もともと盛んであった地場産業の技術や製品を応用して自動車部品を製造する会社が存在するほか、複数メーカーへ納入する独立系部品メーカーの集積がみられた。製造品分類では、輸送用機器よりも地場産業のひとつである金属製品を扱う会社の方が多く、この傾向は完成車組み立て工場のある西部や東部とは異なっていた。東部は、裾野市にトヨタ自動車東日本の完成車工場が存在する。しかし、トヨタ自動車（株）の工場や系列メーカーが集積する愛知県豊田市からの距離がそれほど遠くないため、豊田市から部品供給がなされ、完成車工場周辺の工場は少ない。ただし、日産自動車（株）本社や工場のある神奈川県横浜市と、スズキ（株）本社や工場のある静岡県浜松市のほぼ中間地点に位置し、また工業都市として発展してきた富士市をかかえているため、西部に比べれば小規模ながら、自動車部品工場の集積がみられる。西部は、自動車部品を扱う工場数は圧倒的に多いが、本社や完成車工場の存在から、輸送用機器を扱う工場の割合が非常に高い。このように静岡県は地域により自動車部品工場の立地や特徴が異なっている。